

キャンバスのらくがき☆Picture 3 ☆ 森野かのん

今回は絵を巡る最後のお話です。大学を卒業した歩美は、広告代理店に勤めました。茉莉の手紙以来、何事もなく15年が過ぎていましたが…。

ユウトは途方に暮れていた。どうやったらあいつに知らせることができるんだろう。こっちへ来て以来、たくさんの親切な人に出会ったけれど、ユウトの悩みを解決してくれそうな人はどこにもいない。みな黙って首をふるだけだった。ここは時間が無限にある。そして全てが自己責任の世界だった。自分が気付いた分だけ、世界は広がった。少しずつ、明るく懐かしい世界へと自分が向上していることもうれしかった。ただ、どうしても気がかりなのは、いまだに自分の死から立ち直れないでいる妹のことだけ…。トラックにひかれそうになった真理子を押しのけ、ユウトは自らの命を落とした。5年前の話だ。今、思春期にさしかかった真理子は自分を責めていた。両親との関係も悪化して自分の命すら落としかねない状況だ。何度もあいつにメッセージを送ろうとした。本屋に誘い、あいつの目に留まる本を選んだ。テレビやラジオ、新聞・広告。あらゆるメディアの利用を教えてもらった。あいつの目に触れそうなもの、声が届きそうなもの…。けれど全てが空振りだった。真理子の周りにはユウトの力が及ばないナニカが渦巻いていて、どんな言葉も届かないのだ。ユウトに残された道はただひとつ、祈ることだけだった。

潤一が帰ってきた。1年半ぶりだった。二人をつなげていたのは、月に一度の電話かPCメールのやりとりだけ。空港の駐車場で化粧を直して、歩美は到着ロビーへと向かった。「よう！」混み合うロビーで潤一の姿を探していた歩美は、突然背後から声を掛けられた。「相変わらず、人混みが苦手なんだな」振り返ると、黒いサングラスの目が笑っていた。…よかった。変わってない。歩美は、ほっと肩から力を抜いた。

夕食をとろうと、市内のレストランに入った。1年半を埋めるように話は尽きなかった。海を越え、カメラの技術を学びたいという潤一の情熱と誠実な仕事ぶりが評価されているらしい。「絵は描いてるか？」「…絵？ずっと描いてない…。だめよ、私なんかには全然描かせてもらえないもの。事務仕事に追われてばかり」「…そうか」「今週は忙しい？」「…俺、また1ヶ月後に向こうに戻るんだ」歩美は、目を見開いた。「…そんなの、聞いてないよ」「会ってちゃんと話した方がいいと思って」「今度はいつ戻るの？」「わからない」歩美は、席を立った。「ごめん。私…帰る」

祈っていたユウトの前に、薄紫のワンピースを来た可愛らしい少女が現れた。「お兄ちゃんの声が私の家まで聞こえてきたわ。私ならお役にたてるかもしれない」ユウトは初めて会ったマリと名乗る少女に、妙な親近感をおぼえた。「でもね、この方法が本当にお兄ちゃんと地上の真理子さんと、そして私の親友にとって正しいことなのかどうか、検討しなくちゃ。地上の自由意思や魂修行のことを考えると、そう簡単には動けないの。少し時間をくれる？ 相談してくるから」少女は見かけよりもずいぶん大人だった。ユウトはこっくりと肯いた。

…やっぱり、変わってしまった。歩美は絶望的な気持ちで、部屋の布団にもぐりこんだ。私たちはあの頃には戻れない。私が変わったのだろうか。潤一が帰って来たら、結婚できるとずっと思っていた。でも、彼にとってそんなことはどうでもいいらしい。自分の夢ばかり追いかけて…私ばかりおいてけぼりじゃない。もうだめだ、と歩美は思った。

鐘だ。歩美は、真夜中に目を覚ました。この音は、そう、15年前のあの日も聞こえた。

そっと絵の方を伺うと、棚の上に同じ白い封筒が置かれていた。あの1通以来手紙は届いてはいなかったが、歩美は茉莉から来た手紙のことを信じていた。封を開けると、そこには懐かしい茉莉の筆跡と、少年の言葉が並んでいた。歩美は突然の手紙の内容にとまどいながらも、明日は記された住所の家を訪ねてみることにした。

桜並木の美しい街だった。15年前、一人で電車に乗って見知らぬ土地に出かけた小学生の私の方が、今よりもずっと勇気があった。…夢に向かって飛ぼうとしている潤一。飛べない私。夢すらもうわからないでいる。

目的の家は、並木のとぎれたところにあった。小さな庭があるが最近まったく手入れされていないようだ。チャイムを押した。…誰も出てこない。出直そうかときびすを返した時、すっとんきょうな声が聞こえた。

「あれ？歩美？」振り返るとそこにいたのは潤一だった。「なんでここにいるんだよ」「潤一こそ」「俺はちょっと、人を訪ねてきたんだ」「私も…ひょっとして柳田真理子さん？」「なんでマリスケのことを知ってるんだ」その時、玄関のドアを開けて、痩せた中学生の女の子が現れた。「じゅん先生？…その人、誰？」

こぎれいだけれど、どこかひんやりとした応接間に通されて、歩美は泣きたくなった。紅茶を出してくれた真理子の手首には、無数の傷跡があった。潤一もそれに気付いたらしい。両親とも今日は出かけていないのだという。真理子は新学期になっても学校に行けなかった。

「今日は、悠人の命日だったろ」潤一は持ってきた菓子折と一緒に茶封筒を差し出した。「これは何？」茶封筒から出てきたのは、潤一が訪れた国の子供たちの写真だった。石畳の上の追いかけっこ、安アパートの窓でシャボン玉をふくらます少女。ボロボロの服をまといながらも目は生きる喜びに輝いている。

「この子供達を撮りながら、悠人とマリスケのことを思い出してたよ。家庭教師泣かせだったからな」静かに写真を見つめて、真理子は言った。「…私、生きてない方がいいの」「そんなこと言ったら悠人が悲しむだろ」「…早くお兄ちゃんのとこに行きたい」

真理子は、もう涙も出ないようなうつろな瞳でつぶやいた。歩美は、躊躇していた。信じてもらえなかったら、彼女を更に追いつめてしまうかもしれない。どうしよう…。

「信じられないかもしれないけれど…」歩美は抱えていた紙袋の中から教会の絵を取り出して、真理子に見せた。ここまで来たのだから、やってみよう。歩美は絵にまつわる二つの不思議な話を淡々と真理子に聞かせた。絨毯をじっと見つめていた真理子は、少しずつ顔を上げた。いつしか絵を食い入るように見つめる瞳に、わずかだが光が宿っていくように見えた。そして…「これがね、昨日の夜中、届いたの」バッグから布に包んだ白い封筒を、真理子に渡した。「中の真理子さん宛の封筒は見てないから、安心してね」歩美は、そっと真理子の様子を見守った。やがて目をあげた真理子は、頬を紅潮させて言った。「じゅん先生、これ、信じてもいいよね？ だって、ペンペンへ、って書いてあるんだもん。私のことそう呼んだのは、お兄ちゃんだけなんだよ！」

潤一を乗せた飛行機は、今頃夢に向かって青空を飛んでいるだろう。歩美は、できあがった何枚ものデザインプランを抱えて、会議室に向かっていった。初めてのプレゼンテーションだ。一度でうまく行くはずはない。何度でもやり直してみせる。私には伝えなくちゃいけないことがあるんだから。描きたいことがたくさんあるんだから…。

歩美はもう一度、自分の心に置いた白いキャンバスに向かい始めた。

F i n